

前期に中国からの留学生 2 人へ授業を行いました。後期の授業では国籍も人数も前期とは全く異なる中での授業だったので、約 20 人の学習者を前に、1 人で教壇に立ち授業をするということが全く想像できず、実習が始まるまでとても不安でした。

後期が始まり、1 回目の授業の教案作成に取り掛かりましたが、まるまる 1 コマ 45 分の教案を作るのは初めてで、躓きの連続でした。前期でも教案を作るときに少しの説明を考えるのにかなりの時間がかかっていましたが、それは後期でも変わりませんでした。私は 1 度考え出すと、もっといい説明の仕方、言い方があるのではないかと 1 つのことに倒してずっと考え込んでしまうので、なかなか思うように教案が進みませんでした。2 年生の時や前期の時と比べると、教案を書くことには少しずつ慣れてきて、留意点等も多く出るようになりましたが、1 つ 1 つの活動の説明を分かりやすく優しい日本語で考えていくのはとても難しいことだと改めて感じました。

教材準備に関しては、私は教材を作るのが好きなのであまり苦に感じたことはありません。今回の 45 分の授業を考える時も、「自分の考えた活動や授業をより分かりやすく質の良いものにするためには、どういった教材が必要なのか」を考えることはとても面白かったです。しかし、1 回目の授業の中で読解問題の答え合わせをするときに、解答をさせる順番が混乱を招いたり、貼る所がずれたり足りなくなったりして、自分も学習者も分かりにくくなったということがありました。それぞれの活動により適切で効果的な教材を考えるのは難しく、また作った教材の使い次第で授業の質が大きく変わるということを実感しました。

YMCA での教壇実習では前日からとても緊張し、当日私の直前の U さんの授業の時は、おなかが痛くなるくらいの緊張で、ほとんど頭に入ってきませんでした。しかし、最初の“おはようございます”を言った瞬間に、重い緊張が解けた感じがして、授業をしている間は、思っていたよりも緊張せずにできました。3 回の実習を通してですが、“はっきり、ゆっくり、大きな声で”というのは、今回の実習で常に気を付けようと決めていたことだったので、緊張している中でもそれをし続けることで、緊張も少なくなっていきました。それでも 20 人という人数の前で 1 人で授業を行うのは初めてのことの連続で、たくさんの戸惑いがありました。20 人という人数に圧倒されて、学習者の顔をちゃんと見ることが出来ず、音読をさせるときも黒板の方を見てばかりでした。授業をする前は学習者 1 人 1 人と目を合わせようと思っていましたが、いざ前に立ってみると、目を合わせるどころか顔もしっかりとみることが出来ませんでした。説明したことが分からなかった時や問題が難しい時など、学習者の表情で分かることは多くあるので、しっかりと目を合わせられるようになりたいと思いました。また、羊の写真を見せて「この動物はどここの国にたくさんいますか」と質問した際に、「モンゴル」という想定外の答えが返ってきて、上手く反応できずに流してしまいました。その場で出た学習者のことばを拾って会話に繋げるのは本当に難しいことだと改めて思いました。授業の最後には作文を書いてもらいましたが、学習者が質問してくれたり、質問に対して答えたときに嬉しそうに理解してくれたりすると、嬉しくなると同時に、

学習者が求めている答えを上手く与えられない自分にもどかしさもありました。また、作文の添削をする際には、想像している以上にたくさんを書くので、とても驚きました。

2回目は50分の会話の授業を担当しました。1回目に45分の教案を作った時と同様、2回目の教案作成も、かなりの時間がかかりました。1回目よりも全体的な活動の流れは早く書けるようになりましたが、今回では特に新語の説明を考えるのに時間がかかりました。また、1回目とは違い2人で授業を行ったので、どうやって2人でうまく授業を行うのかを考えるのも難しかったです。しかし、実際に授業をしてみると1人より2人の方が安心感があるなと感じました。1回目の実習では、授業を始めるまでは自分が思っていたよりも緊張しましたが、2回目の教壇実習は前日から全く緊張がなく、「楽しみたい！」という気持ちの方が大きかったので、授業もリラックスしてできました。全体的に1回目の時よりも落ち着いて出来ましたが、会話の文を書いた模造紙を貼る際に時間がかかってしまい、そこから心の焦りが出ていました。私は、周りの人からは「焦っているように見えなかった」とよく言われますが、自分の中では焦っているときが多くあるので、もし準備していないことが起きても焦らず冷静に対処できるように、これからたくさん経験を積んでいきたいと思いました。

また、これまでの授業でも私は表情を課題の1つにしていたので、今回も1回目の授業から意識していました。DVDを見ると、前期の時よりはよくなったと感じましたが、まだまだ笑顔が足りないなと思いました。私は何もしていない時や気を抜いている時等は暗い表情になりがちで、特に2回目の授業は何も話さない時間があつたので、そういった時も柔らかい表情が出来るように練習したいと思いました。2回目の授業の最後には、全員に発表してもらった後に時間が余ってしまい、前でどうしようとあたふたしてしまいました。この時は学習者に違う文章の発表をお願いし、学習者が発表してくれましたが、前で教師が慌てたり焦ったりする姿を見せると、学習者も戸惑ってしまい授業全体の質が下がってしまいます。どんな時でも堂々とする事、時間が余った時の活動を1つではなく、いくつか考えておくことはとても大切だと実感しました。

3回目は25分のことばの復習の授業を担当しました。前期までは25分の教案を作るのも大変でしたが、1、2回目の実習で50分の教案を作ったからか、25分の教案が短く感じました。前期に中国からの留学生2人に授業を行ったときは全く緊張がないということはありませんでしたが、2、3回目の教壇実習では自分でも驚く程緊張はほとんどなく、「楽しみたい！」という気持ちの方が大きかったです。ことばの復習で絵カードを見せて言わせるときには、復習なので私が先に言うのではなく学習者に考えさせて答えてもらい、2回目はただ単語を繰り返すだけではなく絵の状況を言わせる、ということがその場で自然にできました。これは今までなかったことだったので、少し成長できたかなと思う瞬間でした。今はまだ「これに気を付けよう」と授業をする前に何度も確認して意識してやっていますが、学習者のためになる方法は何なのかを冷静に考えられるようになると、意識しなくてもで

きることはあると思うので、そうなれるように頑張りたいと思いました。授業の最後の会話では、同じような反応しかできず全く話を広げられなかったので、リズムを作れずただららとなってしまうました。質問もいくつか抜粋してするつもりでしたが、余裕がなく上から順番にしていくだけで、学習者の立場からは簡単に見えても、教師の立場からだと本当に難しいことだと改めて実感しました。

YMCAでの教壇実習を終えて、約20人の学習者の前に1人で立ち、1人1人に気を配って授業をするのは、とても大変なことだと実感しました。初めてのことばかりでしたが、その分吸収することも多かったです。早く学校へ来て授業の前に勉強していたり、授業中も一生懸命日本語を勉強したりしている学習者の姿を見て、ことばの意味やアクセント等、しっかりお手本となるようにしなければいけないという気持ちが、より一層強くなりました。

「言語学習はすぐに結果がみえるわけではないので、学習者のモチベーションを保つ手助けをすることは大切だ」と前期の「私の日本語教育哲学」でも書きましたが、今回の教壇実習を通じて、その思いが強くなりました。そのためにも、これから多くの経験を積み、引き出しの数を増やし、楽しい授業を作れるようにしたいと思います。